

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

薄れゆく記憶の中で

平塚市立土沢中学校

三年 和田 あやな

私の自宅の近くに、母方の祖父母が二人で暮らしている。二人共もう八十才以上の高齢である。

私は二人が大好きだ。

数年前から、祖父は認知症を患っている。進行を遅らせる薬を毎日きちんと服用しているが、年々症状は悪化している。

認知症になる前は、よく小学校まで迎えに来てくれたり、我が家の隣りにある畑で農作業をしていた。だから、日焼けした腕は年齢のわりには筋肉がもりもりだ。

ゆっくりと進行していた認知症の症状が、急激に酷くなった時があった。祖母の入院の時

だった。祖母がしばらく入院する事を説明してその時は理解しても、十分も経たないうちにまた同じ質問をしてきたり、誰が入院する事になったのかわからなくなったり、怒りっぽくなったり、頑固になったり……。その時の祖父はまるで別人のようだった。そして、何気ない日常会話の中で急に怒り出すようになった。理不尽なことでよく母は怒鳴られていた。

祖父は若い頃から、車が好きだったそうだ。私が小さい頃からよく車やバイクや大型車など多種の免許を持っていると、何度も何度も話してくれた。祖父の自慢の一つなのだろう。だから、今社会問題になっている、免許証の返納の時は、親戚中で大変苦労した。認知症の疑いがあると診断された時、車の運転は控えてくれるようみんなで説得したが、当然納得できない祖父は断固拒否。自分自身、認知症だと理解できていないため、何でもないので、安全にまだまだ運転できるのに、なぜ返納しなくてはならないのかと。母たち姉妹は相談して、口頭でのお願いが受け入れてもらえないのならと、車の鍵を隠した。祖母が入院中の出来事だ。すると、夜中に玄関のチャイムが連打押しして鳴り、ドアを開けると泥だらけの祖父が立っていた。車の鍵が無いと、深夜の暗闇の中、庭や畑を探したのだった。当然見つかるはずもなく、途方に暮れた祖父は、暗い夜道を歩いて我が家まで来たのだった。どうしたの？との問いに「母さん（祖母のこと）が、どこを探してもいないから、車で探しに行こうと思ったら、車の鍵もないんだよ……。どこかに落としちゃったのかと思ってあちこち探したんだけど、見つからないんだよ。悪いんだけど、一緒に母さん探してくれないか……。」

と言った。涙が出た。涙が止まらなかった。今まであたり前にいた祖母は入院中。大好

きな車の鍵も無い。大切にしているものが次から次と見当たらなくなって、きつとパニックになったのだと思うと、涙があふれ出てしまった。なぜ祖母がいなかったのかと鍵は預かっていることを説明すると安心して帰宅した。母に連れられて車に乗り込む祖父の後ろ姿が、何だかとても小さく感じた。

その後、祖母も無事退院し、免許証もなんとか返納することができた。しかし、最近の祖父は、無気力ですっかり大人しくなってしまった。畑仕事も全くやらなくなってしまった。免許証を返納したので、トラクターの運転もできないため、畑の草がぼうぼうだ。そんな畑を見る度に、祖父の存在の大きさをひしひしと感じる。

最近の祖父の口癖は、

「おいちゃん、色んな事がわからなくなっちゃって、もうやんなっちゃったな。」である。

『老いる』ということは、誰にでも訪れる。認知症の症状のせいで別人のような人格になることもある。怒りっぽく、頑固なものも症状のひとつのようだ。しかし、私は決して祖父を嫌いになることはない。私には祖父との沢山の思い出がある。祖父も薄れゆく記憶の中で、私との思い出をたくさん語ってくれる。

私は祖父と祖母、二人が大大大好きだ。